



※令和7年度より四半期毎の掲載となります。
次回掲載は5月号を予定しています。

国際協力1年生の振り返り：初めての海外出張記録

国際医療協力局 連携協力部展開支援課

診療放射線技師 三谷 健斗

2024年1月4日仕事始めの日、私は4月付で現在所属している「国際医療協力局」への異動を言い渡された。あまりにも突然だったため全く実感がなかったのだが、前任者からの引継ぎを受けているうちにだんだんと現状を理解していったのを覚えている。お恥ずかしい話ではあるが、私は当時「ユニバーサルヘルスカバレッジ」や「SDGs」といったものを全く理解しておらず、そんな自分が果たしてやっていけるのか非常に不安だった。今回は、オーストラリアにしか旅行で行ったことのない私が、低所得国を訪れて感じたことや得られたことをこれから書いていこうと思う。気軽に読んでいただき、少しでも海外に興味を持っていただければ幸いだ。

初めての海外出張（inインドネシア）

私が初めていった海外出張先は、インドネシアの首都ジャカルタだった。インドネシアと聞いて初めに思い浮かんだのがバリ島だったため、仕事ではあるがいろんな意味でわくわくしていた。当然私の予想は外れたのだが、ジャカルタの町並みは想像以上だった。街中の大型モニターにはCMが流れ、高層ビルや大型のショッピングモールが至る所に建っていた。インドネシアは現在、上位中所得国として位置づけられているが、ジャカルタの町並みは東京に引けを取らないほどに発展しているように感じた。インドネシアは世界第4位の人口（約2億8000万人）で、中国やインドと同様に新興国と呼ばれている。東南アジアで最大規模の市場を有しており、現在のGDPは世界17位となっているが、2030年には日本に次ぐ世界第4位になるという予想もされてい

るから驚きだ。インドネシア政府は、2045年までに先進国入りを目指して長期計画を立てているようだが、それも実現可能と思えるほど勢いや活気のある都市だった。（実際のところは、現在のGDP成長率5%を維持し続けなければならないようかなり厳しいようだ。）

このような街並みと同じくらい驚いたのが、ジャカルタの交通量だ。渋滞に関しては、東京も引けを取ってはいないのだが、大きな違いはバイクの量だ。ある統計では、インドネシアは東南アジアでタイ、ベトナムに次ぐ第3位のバイク保有率を有し、全世帯の約85%がバイクを保有、1.5人に1台バイクを持っていることになっている。高速道路や鉄道などの交通インフラが未発達なため渋滞が発生し、車の間を通ることのできるバイクの方が人気のようだ。知り合いのインドネシア出身の方いわく、ジャカルタで車を運転するなら空いたところに入っていないかと前に進めないそうだ。大通りでは昼も夜もひっきりなしにクラクションが鳴り、まるで会話をしているかのようなようだった。以前にネットで、渋谷のスクランブル交差点をぶつからずに渡る日本人を見て、外国の方が「日本人は特殊な能力を持っている。忍者だ！」と驚いている動画をみたことがある。ジャカルタ市内をバスで移動しているとき、何台ものバイクがバスの横すれすれを通り、車の間を縫って追い抜いていく様子を見て、私も同じような気持ちになっていた。このような状況がある中で、ジャカルタではユニークな渋滞対策が取られている。それはナンバープレートの数字による規制だ。この規制は2016年から施行されており、平日の通



土砂によって塞がれてしまった道路（左）と開通後（右）の様子

勤・帰宅ラッシュの時間帯にのみ適応される。「奇数偶数制度 (Jadwal Ganjil Genap)」と呼ばれるこの制度は、名前の通りナンバープレートの末尾が偶数か奇数かによって車両の通行を規制する制度だ。バスやタクシー以外のほとんどの車両は規制の対象となり、偶数日には偶数の車が、奇数日には奇数の車がジャカルタ市内の主要道路を通行可能という制度だそうだ。

低迷を続ける日本の経済状況を考えると、失われた30年を取り戻すにはインドネシアのような勢いや柔軟な考え方を見習わなければいけない、と感じた初めての海外出張だった。

日本にはない環境だからこそその強烈な体験 (inラオス)

無事ジャカルタへ出張を終えたのもつかの間、次はラオスに出張することとなった。ラオスに関する情報は全く持ち合わせていなかったため、未知なる国に行くことへの不安と期待でいっぱいだった。ラオスはインドネシアとは対照に低所得国に分類される。そのような国では、平成生まれの私が日本ではあまり感じることもない不便さを体験することができた。しかし、不便だからと言ってそれを不快に思うことはあまりなかった。「郷に入っては郷に従

え」ということわざがあるが、日本とは異なる文化を学び、それを受け入れることは私の人生において貴重な経験になった。そんな環境で体験できた最も印象的な出来事をひとつ紹介させていただきたい。

当時、私は10月にラオスに渡航したのだが、その時期のラオスは雨期であり、スコールによって川の氾濫や土砂崩れなどが発生しているような状況で、目的地までの道はかなりの悪路だった。タイヤが半分以上埋まってしまうような水たまりがいたるところにできており、揺れる車内で何度も頭をぶつけながら移動したのを覚えている。

ある日、目的地に向かって車で移動していると突然民家の駐車場に車が停止した。どうやら土砂崩れの影響で道がふさがれており、バイクが1台通れるほどの隙間しかなくこれ以上は先に進めないようだった。実際に確認してみると、土だけではなく木や岩などもありとても人力では開通までに数日を要するような状態だった。目的地までの道はこの1本しかなく、どうしようか途方に暮れていると、1台の乗用車が現れた。車から2名出てきたのだが、どうやら行政機関の方たちのようで復旧作業に来たようだった。鉈1本で現場に向かう姿は非常に頼もしく感じたが、数人ではとてもじゃないが動かせない



颯爽と現れたホイールローダー

ような岩が転がっていたため、奇跡的にどかせられたとしても日が暮れてしまいそうだった。その様子をずっと眺めているわけにもいかないため、予定を変更するか話し合っていると、駐車させてもらっている民家の方が、所有していたホイールローダーのエンジン音を唸らせながら颯爽と登場したのだ。重機を間近で見られたことにも感動したのだが、土砂崩れで困っているところに、たまたま近くに住んでいた方がホイールローダーを所有していたというなんとも嘘のような状況に思わず笑ってしまった。おかげで道を塞いでいた土砂はあっという間になくなり、無事に目的地に着くことができた。これだけでも十分インパクトのある出来事なのだが、その日の帰り道でもこのホイールローダーにお世話になることとなる。今度は大型トラックがぬかるみにはまってしまい、道路を塞いでしまっていたのだ。予定は済んでいたためあまり焦りはなかったが、いつ解決するかも分からない状況に呆然としているところにそれは現れた。その時の私は、ホイールローダーを運転している彼が、あまりにも手際よくトラックを

引っ張り上げ颯爽と去って行ったので、もはやヒーローに見えるほどだった。こんな経験は記憶に残らない方が難しい。後日、その時の費用を請求されるというオチまであるからなおさらだ。

上記のような話は、ラオスだからこそということではなく、毎回こんなトラブルに遭遇する訳でもないのだが、日本と異なる環境や文化を体験できることが海外に行く楽しみの1つではないかと考える。

最後に、仕事を通じて関わった海外の方たちを見て感じたことがある。私は今回書かせていただいた出張以外にも、海外から研修員を受け入れ、研修やその補助を行うこともある。国や職種など様々な人たちがやってくるが、皆に共通して言えるのは、自国を良くしようとする熱意を持っていることである。研修を受け入れている関係上、教える側と教わる側という形にはなってしまうが、講義の際には積極的に質問し、必死に将来のことを考える姿は見習わなければならないと感じた。彼らに追い抜かれぬように、そして見本となれるような国になるために、私も頑張らなければならないと感じた1年だった。